

家庭の教育力向上をめざした PTA 活動

「親と子の関わりに視点をあてて」

群馬県小中学校 PTA 連合会

母親委員会委員長 湯浅やよい

1. はじめに

群馬県小中学校 PTA 連合会母親委員会は、各都市の女性代表者で構成される委員会です。母親の目線で子どもを取り巻く課題について意見交換をし、各都市の母親委員会及び単位 PTA 活動に通じる家庭の教育力向上のきっかけ作りを目的としています。そして、この委員会活動の総まとめとして、年一回約 200 人が参加して「家庭教育研究集会」を開催しています。

ここ数年「情報機器の活用について」「性モラルの実態」「親と子の規範意識」などをテーマに設け調査を基に研究協議をしてきましたが、複雑化する個人の考え・価値観などを耳にするたびに『教育の原点は家庭教育』の必要性を改めて認識いたしました。

こうした状況をふまえ、県 PTA 連合会として下記のスローガンの基に、親が子に対してどんな関係を築いているのか、その基本となる生活習慣の意識はどのようなものなのか、さらに、親子関係を見つめなおす意味も含めてアンケート調査を行い親としての責務を明らかにするとともに、健全育成にはたす親のあり方を求めて取り組んでまいりました。

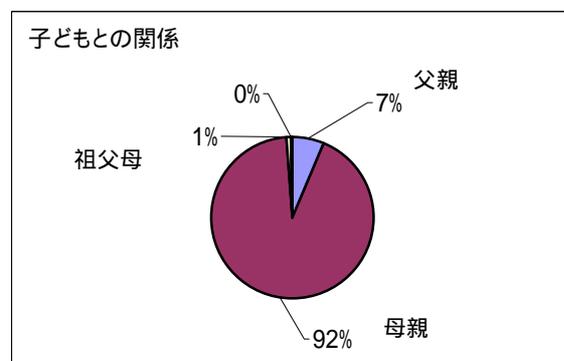
平成 18 年度群馬県小中学校 PTA 連合会スローガン

『学び合おう！次代を担う子どもたちのために』

親子そろってステップアップ 心ふれ合う 親子関係をめざして

2. 調査の内容と考察について

調査対象者は、小学校 2 年生・5 年生・中学 2 年生の保護者です。各都市より、1 学年 100 名を目安に 3 校ずつ選び出し協力依頼いたしました。



小学 2 年生	2,002 名
小学 5 年生	1,950 名
中学 2 年生	2,159 名
合計	6,111 名
協力校	70 校

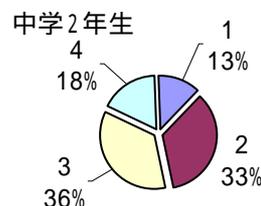
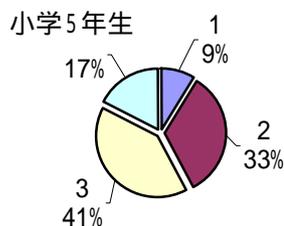
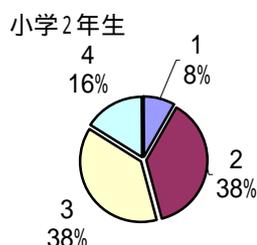
質問内容は「子どもとの関わりについて」と題し、生活習慣やしつけ・子どもとのコミュニケーションがどのように行われているかアンケート調査を行いました。回答者のほとんどが母親でした。

まず、子どもの就寝時間と登校時間について質問しました。学年が上がるにつれて就寝時間が遅くなる傾向にありますが、小学校2年生全体の約10%の子どもは、就寝時間が10時以降です。低学年の子どもたちが登校時間に合わせて起床するとしたら睡眠が足りないということは明らかです。起床してから登校するまでの間に必要とする時間を考えれば、子どもは登校時間のどのくらい前に起床すればよいかわかりますが、およそ12%の家庭では15分以内また15分から30分を選択いたしました。子どもにとっては最も必要な朝食と排泄はままならないと考えざるをえない結果だと思います。あらゆる調査の結果では15%から20%の子どもが朝食を食べてこない事がわかっています。朝、親が起きられない、朝食が作れないなども理由のひとつだそうです。朝食を摂らずに学校で勉強に集中できるのか、先生方や友だちと穏やかな学校生活が送れるのか学校での子どもの様子を見れば、明らかなことだと思います。

質問 1 子どもは何時に就寝しますか。

質問 2 子どもは登校時間の何分くらい前に起床しますか。

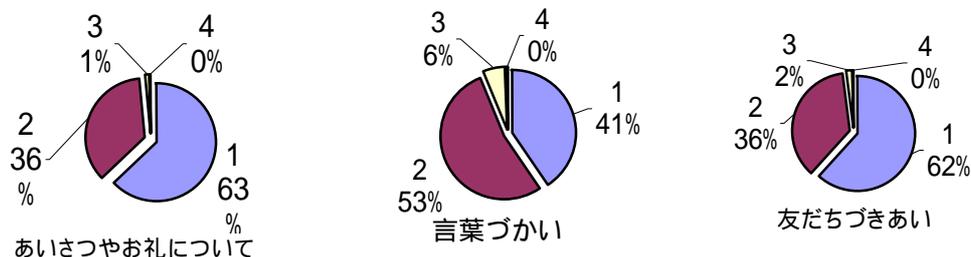
質問 3 テレビ・ゲームを合わせて一日どのくらいの時間を費やしていますか



選択 1. 全くない 2. 1時間くらい 3. 2時間くらい 4. 3時間以上

どの学年も似たような結果が出ました。テレビやゲームに毎日3時間費やすと、中学校の1年間の総授業時を越えてしまうと指摘されていますが、3時間以上を選択した家庭は全学年平均17%でした。また「テレビを見ながら食事をしているかどうか」の質問に対して、「見ている」を選択した家庭が各学年平均80%にも上り、食事の中の家族間の会話や就寝時間にも大きな影響を与えていると考えられ、親には小さい頃からの生活習慣の大切さを認識してもらう必要性を感じました。また、起床、睡眠、テレビ視聴、朝食はそれぞれが別のもので無く、一つのつながりを持っており一連のものとして、しつけていくことが大切であるという考えかたをしていくことが必要であると感じました。

質問 4 あいさつ、言葉づかい、友だちづきあいの大切さを教えてください



1. とても心がけている 2. まあ心がけている 3. あまり心がけていない 4. まったく心がけていない

「とても心がけている」「まあ心がけている」を選択した親が非常に多く、子どもたちに礼儀や社会性を身につけさせたいとの親の気持ちが伝わってきます。少子・核家族の環境に育ち他人との付き合いが苦手な、また赤ちゃんにふれ合う機会もない子どもも多いと聞きます。こうした環境は、子ども自身が成人した際に大きな影響を及ぼすと考えられ、そうした結果、親の意識の中に人間関係への感心を持ってほしいと言う願望があらわれているのではと思います。

質問 5 子どもは家事を手伝いますか

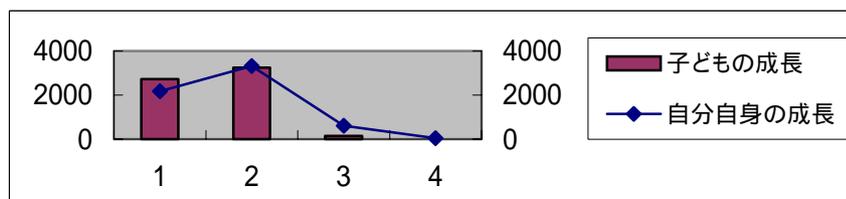
質問 6 食事の態度やマナーを教えてください

質問 7 身の回りの事は自分でさせるようにしていますか

上記の質問に対する回答では、大概の家庭で子どもに促していることがわかりました。

中学に上がると、部活や勉強などで忙しくなり「あまり手伝いをしない」「しない」が増えていくようですが、家族の一員としての役割を認識させるには手伝いをさせることを大いに役立ててもらいたいと感じます。「食事の態度やマナーを教えてください」の問に対して、「心がけている」を選択した人がどの学年も100%近い割合でいましたが、テレビを見ながら食事をしている人が態度やマナーをどう教えているのか疑問に思います。「身の回りの事は自分でさせるようにしていますか」の質問に対しては、各学年とも「積極的に」が非常に多く、子どもに自立心を持たせたいという子育てを心がけていると考えます。

質問 8 子どもの成長と自分自身の成長の比較



1. よくある 2. 時々ある 3. あまりない 4. ぜんぜんない

グラフは「子どもが成長したと感じる」設問と「子どもを持つことによって自分自身が成長したと感じる」設問を比較したものです。98%の親が子どもの成長を実感していると答えたのと同様、親自身も「ある」と答えた人が高い数値で表われました。しかし、全体の11%にあたる親が自分自身の成長を感じる事が「あまりない」「全然ない」を選択しています。また、わずかではありますが、155名が子どもの成長が感じられないと答えています。両方を選択していた場合、子育てに不安や不満を感じていることにつながらないとは限りません。いろいろな体験を通して、親子が共に成長していく日常の積み重ねが大切で、このことが自信につながるものと思います。

質問 9 子どもを褒めるようにしている

質問 10 子どもを感情的に叱ってしまう

子育てにおいて、褒めることと叱ることは大変難しいと考えます。「子どもを褒めるようにしている」では「よくある」を小学2年生が一番多く日常生活の中で褒めることが多いことがわかります。「時々」に関しては、中学2年生が多いという結果が出ました。中学生ですから、成績や部活のことではないかと考えられます。「子どもを感情的に叱ってしまう」の設問では、褒めることのグラフの伸びと同じような結果となりました。学年が上がってきた中学2年生を「ときどき感情的に叱ってしまう」保護者が多かった理由には、親と子のコミュニケーションの図り方が難しくなっていると考えられます。褒めたり叱ったりすることは、学年によって理由の違いがあるものの、どんなことで褒めてどんな場面で叱るかが、子どもとの信頼関係を大きく左右するものと思います。

「子どもに干渉し過ぎないようにしている」どの学年も80%以上の親が、干渉し過ぎないようにしていることが「よくある」「時々ある」を選択しました。似たような結果が出たのが面白いと思います。干渉し過ぎないことが子どもにどんな影響があるのか、その割には「感情的に叱ってしまう」ことも多く、普段の子どもとの関わり方が親子の関係を大きく左右していることがうかがえます。こうした子どもへの遠慮ともとれる結果は、友人関係や学校の事など、親が少しずつ事情を把握し切れなくなっていく実態もうかがえるように思われます。

質問 11 子どもとコミュニケーションを図るために大切にしていること

9つの選択回答の中から最も多くの親が「子どもに一日の出来事を聞く」を選びました。2位では「家族みんなで食事をする」で1・2位ともに全学年共通の順位です。なかでも中学2年生の親が非常に高い割合で選択をしています。子どもが部活や塾で忙しくなり、家族となかなか一緒に食事をする時間がなくなるからこそ、特に大事にしたいと考えた結果なのではと思います。3位では小学2年生だけ、「お風呂に一緒に入る」ことを選択しています。低学年だからこそできるスキンシップを大事にしてもらいたいと考えます。小学5年生と中学2年生では「友だちや先生の事につ

いて話をする」を選択しました。1位も含めて考えると、親は子どもの学校での様子に非常に関心が高いことがわかります。

3.まとめ

調査結果をまとめる中で、調査結果からいくつかの疑問が思い浮かびました。例えば、安全パトロールに協力をされている地域の方々から「自分たちが積極的に参加をしているのに保護者からはあいさつがない」と言われることが度々あります。また、「友だちづきあいは大切にするように教えている」ならば、なぜ、いじめがなくなるのでしょうか。「目上の人・先生・高齢者の方への言葉づかいを教えている」という結果と現実とでは、ずれは無いのでしょうか。

研究集会での基調提案の中でこうした投げかけをしたところ、6つの会場に分かれた分散会では友人関係・部活などで問題を抱えてしまったわが子を全力で守りぬいた話をしてくれたお母さんがいました。ある学校の校長先生は、「普段自分の学校の保護者にはなかなか話ができないことも、違う地域だからこそ話しやすくとても参考になった」という感想をお話し下さいました。

今回の調査でわかったことは、日常の生活習慣を通していかに親が子どもと関わっているか、コミュニケーションを図っているかに関して、確かに親の子どもに対する関心や意識は高いということでした。しかし大切なのは親が普段そうした手本となる言動を子どもたちに示しているのかどうかということです。日常の小さな出来事の蓄積が子どもの物の考え方や価値観を大きく左右すると気が付きました。

さらに一人一人の子どもを育てるには、個人だけで実行していれば良いのではなく、隣人や地域の人々さらには地域社会で取り組まなければならないことも痛感しました。

いけないことはいけないと教える事、教え方が大切であるとともに、子どもの良さを認めてあげることも大切です。そうしたごく当たり前の日々のふれ合いの中にこそ、人が人として生きていくために必要な生活習慣や人としてのやさしさや思いやりが芽生えるものだと思います。

今、いじめの問題が大きな課題となって立ちはだかっています。日々の地道な親子の関わりの不十分な結果が重大な事件を引き起こしてしまうこともあり得ると考えると親の責任は重大です。

この母親委員会での取り組みがそれぞれの地域の活動に繋がり、その活動の声が返ってくるような連携が図れてこそ、家庭教育研究集会の成功と言えるのではないかと思います。

今後も群馬県の子どもたちの健全育成のために活動を深めていきたいと考えています。